

一 次の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- 1 人の往来がはげしい。
- 2 心配事が杞憂に終わる。
- 3 世間の耳目を集める話題。
- 4 秋の風物をめぐる。
- 5 海外企業の参入を促す。

二 次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 表現のチョウフクをさける。
- 2 次第にトウカクを現す。
- 3 事前の対策がフカケツだ。
- 4 セイゾウ元に問い合わせる。
- 5 話ナカばで席を立つ。

三

次の1～5について、ア～オの各語を「」内の内容によって分けたとき、ひとつだけ他と異なるものを選び、記号で答えなさい。

(問題例) ア 木魚 イ 岩魚 ウ 河豚 エ 烏賊 オ 雲丹 [種類]

↓(答え) ア ……この語のみ生きものではない。

1 ア 帰雁	イ 白露	ウ 秋空	エ 紅葉	オ 名月	[季節]
2 ア 小生	イ 拙宅	ウ 粗品	エ 愚考	オ 御社	[敬意の表し方]
3 ア 消印	イ 封筒	ウ 郵便	エ 通帳	オ 貯金	[熟語の読み方]
4 ア 誕生	イ 入学	ウ 卒業	エ 就職	オ 昇天	[熟語の構造]
5 ア 人参	イ ネクタイ	ウ 鉛筆	エ てぬぐい	オ 豆腐	[数え方]

四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

お初が叔父^{おじ}さんに連れられて、初めて麹町^{こうじまち}の方のお屋敷へお目見えにあがったのは、ある日のお午^{ひる}少し過ぎでした。お初はやつと十歳になったばかりでしたけれど、軀^{からだ}は十二歳位の大きさでした。

お初は、お父さんが亡くなってから、お母さんと一緒に四谷の叔父さんの家へ来て、そこで世話になっておりましたが、そこもそんなに楽^①な家でもありませんでしたので、叔父さん夫婦とお母さん^②と相談のうえで、叔父さんの出入りしているそのお屋敷へ奉公に上がることになったのです。

その日はお母さんが朝のうち、お湯につれて行ってくれたり、髪を結って白粉^{おしろい}をつけてくれたりしました。その間にもお母さんはお初に色々のことを聞かせました。

「どなたの仰^{おつしや}ることもよく聴いて、皆さんに可愛^{かわい}がられるようにしなければ駄目だよ。お行儀がわるいからと言われて返されて来たり何^③かするのではありませんよ。」

お母さんは言いましたが、どうやら目のうちがうるんでいました。六つになる妹のお花も傍^{そば}でそれを聴いて、様子を感づいたようでした。そして「姉さんは何処へ行くの」と、幾度も幾度も心配そうに聞きました。お初は何だか悲しくなって、へ 1 ヲ涙を流していました。そこへ叔父さんが、晴れ着の羽織なぞを着込んで、奥から出て来ました。

「さあ初坊叔父さんで行こうや。何にも悲しいことはないや。奉公だって、外^{ほか}のお屋敷と違って、あすこならもう皆さんが、実に好い方ばかりで、きつと親切にして下さるよ。」

お初は新しい下駄^はを穿^はいて、蝙蝠^{こうもり}と、お目見え中の着替えを持って、叔父さんの後から家を出ましたが、何だか厭^③な気がしたので、お母さんやお花の顔を見ないようにしていました。

叔父さんは経師屋^{きようじや}でした。そして永年そのお屋敷へ出入りしていましたから、その隠居さまや若い御主人や奥さまにもよく氣^①

心を知られていました。

※ 行つて見ると、お屋敷は成程立派なものでした。まだ木の新しい門を開けて入ると、玄関まで砂利が敷き詰めてあつて、右左に美事な植込みがありました。まだ寒い時分でしたから、木の根方には枯れ松葉をどつさり敷いてありました。叔父さんの後について、お初がへ 2 ヲ 勝手口の方から顔を出しますと、すぐそこにお料理場がありましたが、もったいないほど綺麗で、見たこともないお料理の道具がいろいろ揃つておりました。中には何やらへ 3 ヲ 光る器械のような物もあつて棚の皿や鉢、コーヒ―茶碗や杯なども、いずれも贅沢な品ばかりでした。

お初はお茶の間のようなところを、二間も三間も通つて、ちよつと部屋の入口へ来て、叔父と一緒に坐りましたが、そこには若い束髪（きりかみ）の綺麗な奥さまが、切髪（きりかみ）の品のいい御隠居さまと一緒に、産まれて八月か九月くらいの可愛らしい赤ちゃんをあやしておいでになるところでした。床の間には美事なお花が生かつて、お琴が立てかけてありましたが、皆さんのお傍にはお菓子器やお茶道具や、赤ちゃんの玩具などが散らかっていました。

世のなかには、こんなに綺麗に暮らしている家もあるのかと、お初はきよときよとしていましたが、その障子の腰硝子（こしがらす）から見える、お庭は公園よりも広そうで綺麗でした。

「好きな子ですね。」

「軀もすっかりしていますから、役に立ちそうですよね。」

隠居さまと奥さまとが、そう言つて話しておいでになるので、お初はやつといくらか気が落ち着きましたが、まだまだなかなか安心することは出来ないと思いました。叔父さんは、この子が哀れな身のうえだということをお話しました。年の割には捌巧（りくちう）だといふことも、少しは自慢しました。

「はやく親に別れるような子はどこか違いますね。」隠居さまはそう言つて、気の毒そうにお初の顔を眺めました。

「まあ置いて行つて見てごらんさい。この子が落ち着くようでしたら、私が末長く面倒を見てあげますからね。」親切そうな隠

居さまはそうも言いました。

「まあ自分この子でも少しずつ見てもらひましてね。それも体を背中へ縛りつけておくようなことはしませんから、子守る方でもそう骨はおれませんよ。」そんなことも言っていました。

「何分どうぞよろしく。」と、叔父さんは幾度もお辞儀をしました。

「それじゃ叔父さんは帰るから皆さんの仰ることをよく聴いて、いつまでも置いて頂くようにせんけりゃいかんよ。」叔父さんは帰りがけに、女中達にもお初のことを頼んでから、勝手口でまたお初に言つて聴かせました。その時はお初はへ 4 ヲ した顔を見せていましたが、叔父さんに別れてしまうと、急に何だか家のことなどが想い出されて、小さい胸が塞がつて来ました。お母さんや妹の顔も、目にみえるようと思わず涙が湧いて来ました。

しかしお初は、直に氣を取り直すことができませんでした。そしてみんなで四人いる女中の傍へ行つて、その日のおやつなどを頂いた頃には、何を聴かれても、はつきり返辞も出来たし、みんなが好い子だといって、褒めてくれましたので、何だか氣が引き立って来ました。中にはお初が、つい四月ほど前に、父親に別れたのだと聞いて、可哀（かわい）そうだといって、目をうるませてた女が（エ）ありました。そしてみんなはめいめいに自分の親のことを話し出しました。するうちに奥の掃除に取りかかるものもあり台所で奥さんのお手伝いをして晩の御飯の御馳走（ごちそう）ごしらえに立ち働くものや、風呂の火の加減を見に行くものなどもありました。

お初はそのあいだ、奥の部屋で赤ちゃんのお守をしたり、二人ある上の子供たちの用をたしたりしていましたので、もう氣がまぎれて、家のことなどはしばらく思い出しませんでした。上の子は二人とも愛らしいお嬢さんでしたが、色の白い、目のぱちりした二番のお嬢さんが、どうやら少し意地がわるそうに見えるだけで、一番上のお嬢さんは、いかにも素直そうなやさしい顔立ちをしていました。

御主人のお歸りになったことも、お初は少しも知りませんでした。湯殿へおいでになるその姿が廊下の方に見えたとき、お初はじきにそれと氣がつかしました。そしてお目見えしたのは御飯の時でしたが、御主人は、家のことはそうかまつてはおいでにな

らぬらしく「ふむふむ」と云つて、奥さまのお話を聴いておいでになるだけでした。御主人はその時美しい色をした洋酒などを召しあがつてでしたが、そのお座敷には室内暖炉がすえてあったり、目もさめるような屏風が置いてあったり、器具がおいであつたりしました。

お初はそんな立派な部屋を初めて見ましたので、目に入るものが、一つ一つ何だか芝居の舞台でも見るような気がしました。そして東京にこんな暮らしをしている人のあることを見も知らない母親などが、気の毒のように思われて来ました。

御飯のすんだお嬢さんたちも、お父さんやお母さん（お）の側へ来て、そこにあつた蜜柑（みかん）などを食べたりして、さも楽しそうに学校のお話や、活動のお話をしあつていました。お父さんはお酒をへ 5 ヲ飲みながら、へ 4 ヲした顔をして、それを聴いておいでになりましたが、時々さも嬉しそうな声を出して、奥さまと一緒に笑いになりました。

お初は世のなかには、こんなへ 6 ヲした楽しい家もあるのかと、つい自分もそれに引き入れられるような気がしました。御主人はお初（お）の膝（ひざ）にいて、時々手足を動かしたり、何か感動したように、張りつめた目をしたりする赤ちゃんの方へも、時々目を見張つておあやしになりました。赤ちゃんはお父さまのお顔を、もういくらか覚えていたようでした。

「初は兄弟が幾人あるのかい。」などと御主人がお聞きになりましたが、お初はただ淋しげに笑つただけでした。

お湯へ入ってから、洗濯したお襦袢（しほ）などを幾組も幾組も熨（お）したり、畳んだりしてから、お初が床についたのは、もう大分遅うございました。お初は目が変になつて、電気の明るいなどに、反（かえ）つて疲れをおぼえましたが、床に入つてからは、目が冴（さ）えだして来て、急に寝つかれそうもありませんでした。傍にぐっすり寝込んでいる他の女中たちの歯ぎしりや寝言なども耳につきました。するとまた、夢のような今日一日のことがへ 7 ヲと疲れた頭脳（あたま）に思い出されてきました。そして昨夜まで枕をならべて寝ていた妹やお母さんのことが、恋しくなつて来て仕方がありませんでした。しかし、半日で自分になつたような、あの可愛い赤さん（カ）をおいて、ここを出ようとは思いませんでした。

（徳田秋声『初奉公』より。読みやすくするため、現代表記へと改め、送り仮名やふり仮名の加除を適宜おこなつた。明らかな誤りと思われる箇所は訂正した。）

※お目見え ここでは、奉公人が正式に雇われる前の見習い期間を指す。

※美事 見事のこと。

問一へ 1～7に入ることばを次の中から選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか使えません)

ア ごちゃごちゃ イ にこにこ ウ おずおず エ うきうき オ ちびちび カ ぴかぴか キ ほろほろ

問二——線部(ア) (カ)は二人の呼び名が混在しています。正しく分別したものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ア／イウエオカ
イ アウ／イエオカ
ウ アウオ／イエカ
エ アウカ／イエオ
オ アウオカ／イエ

問三——線部①「楽」について、なにが「楽」ではないのでしょうか。本文中から三字で抜き出して答えなさい。

問四——線部②「何かする」の内容として**ふさわしくないもの**を次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア いたずらをする。 イ 不祥事を起こす。 ウ 困ったことをしでかす。
エ 奉仕活動をする。 オ 迷惑をかける。

問五——線部③「厭な気」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あれこれと世話を焼くお母さんをうとましく思う気持ち。
イ 幾度も同じことを聞くお花をしつこいと思う気持ち。
ウ お母さんやお花との別れを悲しく思う気持ち。
エ 家族から自分を引き離す叔父さんを恨む気持ち。
オ 知らぬ間に奉公先を決められたことを不快に思う気持ち。

問六——線部④「哀れな身のうえ」を具体的に述べた部分を、これより後の本文中から探し、十五字で抜き出なさい。(句読点・符号も一字と数えます)

問七——線部⑤「お初はただ淋しげに笑っただけでした」とありますが、「お初」がこのような態度を取った理由として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 御主人の問いかけに、それまで忘れていた家族のことをふと思い出してしまったから。
イ 御主人の問いかけがあまりに急だったため、自分の兄弟の数を忘れてしまったから。
ウ 御主人からの思いがけない問いかけに驚き、すぐに答えを返せなかったから。
エ お座敷で目にしたものがあまりに刺激的だったため、御主人の声も耳に入らなかったから。
オ 履歴書を見てお初の家族構成を知っているはずなのに、わざとらしい質問をする御主人に腹が立ったから。

問八 「お初」が奉公先に対して警戒心を持っていたことを示す箇所を本文中から二十五字で探し、最初の五字を抜き出しなさい。
(句読点・符号も一字と数えます)

問九 ―線部⑥「ここを出ようとは思いませんでした」とありますが、このときの「お初」の気持ちを七十字以内で説明しなさい。

問十 この小説についての説明として**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 情景を描写するのに比喩表現を用いて、読者の想像を助けている。

イ 同じような文末表現を用いることで事実がたんと描かれている。

ウ この小説は主に主人公「お初」の立場から描かれたものである。

エ 間取りや調度品などをこと細かく具体的に表現することでお屋敷の立派さを表している。

オ この小説は主に主人公「お初」とその他の登場人物との会話文で成立している。

五

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

現代日本語には「社会人」という語彙がある。新年度、つまり四月一日になると新聞、テレビ総動員で各企業の新入社員の入社式のことを報道し、あたらしいスーツとネクタイ姿の若者がその抱負をのべたりする。そんなふう就職した青年たちのことをなぜか「社会人」になったというのである。たぶん、人生のその段階から「ヒト」は「一人前」としてみとめられる、ということなのであろう。ア

だが、そんな区切りをつけなくても、「ヒト」は生まれたときから「社会人」なのである。世間に仲間入りしているのである。生まれたばかりの赤ちゃんにとって、はじめて経験する「世間」すなわち「社会」は母親の声であり、肌の触覚であろう。そして、間もなく、こんどは父親だの親族だの、あるいは近隣のひとびとの感触。「人間」はそこからだんだんと「世間」に接してゆくのである。

「人間」という二文字を「ジンカン」と読む用例は八世紀の『続日本紀』に「禪師即誓、永絶人間、侍於山陵、転読大乘、奉資冥路」とあって、これは「世間」とほぼ同義。これを「ヒト」という意味で使用した事例は『今昔物語集』に「天人は目不瞬かず、人間は目瞬く」とあるのが初出らしい。十二世紀のことである。つまり語誌からいうと「世間」と「人間」はおなじことなのだ。「人」と「人」との「間」に生まれてくるのだもの、人間はもともと世間に所属しているのである。

いまわたしは「人」と「人」とのあいだ、といったが具象的な意味でも「人間」は「人の間」の産物だ。ひとりの「人間」が生まれるのは両親、すなわち夫婦あつてのことである。いうまでもなく人類という生物の「種」は、男と女の配偶関係によつてつづいてきた。「ヒト」はすべて親の子である。両親あつての「ヒト」なのである。おおくのばあい、婚姻届のある夫婦が両親だが、さまざまな理由で「夫婦」以外の男女のあいだに生まれたことももいる。

むかし「家族」は「男女とそのあいだに生まれたこともから成る集団」と定義された。しかしこれではいろんな例外が発生して

きたから、このごろでは「家族」の定義はアイマイで不可能にちかいものになっている。だが親のいない人間は存在しない。親子きょうだいという「血縁」という名の集団こそが、ひとりの「ヒト」が経験するさいしょの世間なのである。

そんなふうに「社会人」として生まれたことは、すこしずつ世間をひろくしてゆく。ベビーカーにのせられてそとにできれば知らないひとが目にはいる。ときには声をかけてくれたりする。バスや電車のなかでは何十人、何百人もの人間がいることを知覚する。保育所だの幼稚園だのではじめて「ともだち」ができる。いっしょに遊ぶがケンカもする。ときには「いじめ」を経験したりもする。イ

そのあと、小学校、中学校と学校生活のなかで、A「世間」はひろがってゆく。苦勞もする。そして、人間十二、三歳にもなると、すこしずつ「親ばなれ」がはじまる。京都では「十三詣り」といって男女とも十三歳になったら虚空蔵菩薩にお詣りにゆく。ここから「ヒト」は独立するのである、そして親もとの外側にある世間にすこしずつはいつてゆく。イメージでいうと、ひとりの豆粒のような人間をとりまいてる家族あるいは血縁集団というちいさな円が、その外側にむかって大きな同心円にふくらんでゆく。それが「世間」なのだ、といってもよい。そこから人生という名の旅がはじまるのである。

普通教育が普及するまえの村落で、家族からはなれた少年たちがまず経験するのは「若者組」という同年配のこどもたちの集団であった。「年齢階梯集団」である。地方や時代によって、その運営方法はちがうが、村の少年たちは「若者組」にはいる。ときに「若者宿」という合宿所のようなところで起居をともにすることもあった。女の子にはべつに「娘宿」があったりする。この同年輩の仲間のなかで先輩は後輩にさまざまなことを教え、その経験によってすこしずつ世間への目をひらかされたのである。ウ

やがて教育制度がととのつてくると、若者組のかわりに、同年輩のこどもたちはおもに学校をつうじて「仲間」をつくるようになった。学校での同級生も仲間だし、公園でサッカーをする仲間もある。おおむねほがらかで、たのしそうだが、初期反抗期の少年少女だから、B「こういう仲間はあれこれイタズラをしたり、ときにはよからぬこともする。ケンカや暴力沙汰もある。」「世間の」はときとして冷たいのである。

こういう都市の青少年のグループのことをアメリカ英語では「ギャング」という。ウィリアム・ホワイ特 (William Whyte) の『街かどの仲間たち』(Street corner society、一九四三年) という本はアメリカの大都市でのイタリア系青少年のギャング集団のみごとな研究だった。いや、映画『ゴッド・ファーザー』のはじまりの部分で貧民街の少年たちがどんなふうに着ていたかをみるだけでもその事情はわかるだろう。

十二歳というのは労働力として役に立つ年齢でもあったから、むかしは都市にでて商家などで丁稚奉公をする男の子もおおかつた。女の子は女中奉公。こうした若年の「出稼ぎ」は十八世紀なかばから顕著になってきた。番頭、手代といった親代わり、きょうだい代わりの先輩や上役がたくさんいて、いろんなことを教えてくれた。もちろん親切に教えられるだけではない。イジめられたり、意地悪されたり、ダメされたり。そんな「世間の」によって人間は成長したのである。そんなふうに世間で揉まれてだんだん一人前になってゆくことを「社会化」(socialization) という。

(中略)

いまの日本では中学までが義務教育になったから、最低十五歳までは親もとで生活するのがふつうだ。そのあととも学校生活がつづくから、むかしにくらべればきびしい「世間の」にあたるのは、ずいぶんおそくなった。とすれば定職につき、定時に勤務先に出勤して生身の上司、先輩、同僚とのかかわりのなかで訓練してはじめて新人社員は一人前になるのも当然である。そんな理由から、③新卒の若者をあらためて「社会人」とよぶようになったのはじゅうぶんな理由と意味があるのかもしれない。

さきほどわたしは親子きょうだいがつくる「家族」という集団が人間にとっての原初的な世間だ、とのべ、それを「血縁」によるもの、と書いたが、それはただしくない。なぜならひとりの人間を生む男女のあいだには「血縁」関係がないからである。「夫婦は他人」なのである。その夫婦、あるいはひと組の男女がめぐりあったのはまったくの偶然にはかならない。親子関係は必然だが、夫婦関係は偶然なのである。極端に言えばもののハズミなのである。偶然が必然を生み、その必然がつぎの偶然を生む。エ

その偶然を必然化させている原理は「縁」というものであろう。縁あって特定の男女がむすばれる。「縁談」をつうじての婚姻

関係などは実質的にすくなくなっているようだが、それでも出雲大社をはじめ「縁結び」の神様は **C** にいらつしやる。

(中略)

「縁」というのはもともとは仏教用語である。仏教の観念体系はややくして理解を絶することが **B** だが、仏教関係の書物を読むと「縁」というのは「ある結果(果)を導き出す直接的な原因(因)に対して、それを外部から助長させる間接的な原因。因と果とを結び付ける外部的な作用。因縁」のことだ、と定義されている。たとえば、あなたに配偶者がいる(果)のは年頃の異性がいたから(因)である。しかし、数ある異性のなかで、特定のひとりとりわけしたしくなつて結婚したのは「縁」である。

その男女の「縁」があるからこそ、その間のめんどろな人情の機微をめぐつて神話や文学がうまれた。古くはアダムとイヴ、イザナギとイザナミ。すべて男女の求めあいを主題にした物語であつた。文学作品を思いつくままに硬軟とりまぜ列挙しても『ロミオとジュリエット』『曾根崎心中』『赤と黒』『金色夜叉』『嵐が丘』などおびただしい文学作品はことごとく男女求愛、悲恋のおはなしではないか。男女の「縁」こそがすべての「縁」の出发点なのである。落語の「厩火事」のマクラには「これは縁というよりほかに解決のしようがないなというのが、やつぱり夫婦の縁でしょう。あれはほかに、しようがない。縁ですね、あれは」とある。

オ

だが、「縁」がこれら文学作品のようにロマンチックなものになりうる理由は特定の男女が仲良くなることの根源に「好ききらい」^④という単純な原理がはたらいているからだ。神様のお引き合わせだ、などというのはあとになってからの理屈で、じつさいにはおたがい数ある候補者のなかから好きな相手を「好ききらい」でえらんでいるのである。「お見合い」婚で、候補者を写真だの身元だので知つても、気に入らなければ^{※いんぎん}慇懃にお断りする自由はある。そしておたがい憎からずおもう相手と交際して、それなら、というのでいっしょになる。「縁」というのは、そういう「好ききらい」原理での選別がおこなわれたあとで事態を合理化するためのものであることが多いのだ。そして、あれだけ好いて好かれていっしょになつたはずの配偶者も「性格の不一致」ということばでサラリと離婚してしまつたりもする。

あなたがいま、ある学校の学生・生徒であつたり、ある会社の社員であるというのも、かなりのていどまで「好ききらい」の結果である。なにかの「縁」でこの学校、あるいは会社にいるというのはたしかだが、**D** この学校の入試、あるいは会社の入社試験を受けようという興味と意思があなたにあり、学校や会社がわにも、この人物を入学させよう、採用しよう、という選択があつたからだ。むずかしくいえば、わたしたちは「選択的行動」によつて世間とつきあい、それと「縁」という観念とを同調させているだけなのかもしれないのである。

じつさい「好ききらい」原理は人間関係のうえで重要なはたらきをする。俗に「ウマが合う」とか「ソリが合わない」とかいった語法があるが、いろんなひととのつきあいのなかで、たのしくいっしょにしごとのできるひと、逆にできるだけ避けたいひと、さまざまであることが経験的にわかつてくる。「相性」のよしあしが人間関係を決定するのである。

唐突なようだが、その問題をはじめて本格的に研究したのはアメリカの戦略空軍であつた。B-29の無差別爆撃で多くの同胞を失い、家を焼かれた日本人としては複雑な気持ちになるが、あの大型爆撃機は機長以下、数名の乗組員がせまい機内で協力しなければならぬ。観測係と爆撃手、そして機銃手。みんなが心をあわせて「あうんの呼吸」で出撃できるような態勢であれば戦果もあがるし、無事に帰投する確率も高い。だが相性の悪い組み合わせの乗組員が搭乗した爆撃機は戦果どころか、敵機に撃墜されることが目立つて多い。

そこで学者が動員されて、どんな性格の人間を組み合わせるのがいいか、を研究しはじめた。ひとりひとりの乗組員に、だれといっしょに乗り組みたいか、逆にだれとソリが合わないか、その人間関係図をつくつてみた。ソシオグラム(sociogram)という手法であり、その基本になつたのは心理学者モレノ(Jacob Moreno)が提唱した「社会計測学」(sociometry)とくう^⑤学問であつた。こうした「相性」の研究はたとえば工場の流れ作業での能率だの、レストランでの厨房から配膳までの一連のサービス業務だの、いろんな場面に応用がきく。チーム・ワークを根幹とするスポーツの世界だってそうだ。いくら個々人の能力がすぐれていても、仲間どうしの連携がしっかりしていなければチームは負ける。それもこれも「相性」原理がどこではたらいていることが **B** で

ある。だから、チーム・スポーツの監督やコーチは選手の性格を見きわめてそれぞれの持ち場や交代の時期などを的確に判断し命令する。

会社の人事などにもそんなことがある。あいつの性格だったらあのチームからこっちのチームに異動させたほうが能力が発揮できるんじゃないかな、と判断した上司はその人事配置の変更をおこなう。そのほうが組織ぜんたいのためにもなるし、なによりも本人の成長のためになる。ひととひとは「縁」で出会うけれど、出会った「縁」をさらにゆたかにしてくれるのはよき仲間の設計にある。家庭でも職場でも「ウマが合う」ひと、つまり相性のいい人間といっしょに暮らすことが人生のよろこびというものではないのか。

(加藤秀俊『社会学―わたしと世間』より)

※禅師即誓、永絶人間、侍於山陵、転読大乘、奉資冥路「禅師即ち誓わく、永く人間を絶ちて山陵に侍り、大乘を転読して冥路を資け奉らむ」と読む。「禅師(高僧)が人間社会から離れ、帝の御陵に控えて成仏の助けとなることを誓った」という意味。

※懇懃 きわめて丁寧なこと。礼儀正しいこと。

問一 本文中の A D にあてはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか使えません)

ア うとうと イ しばしば ウ そもそも エ ほうぼう オ いよいよ

問二 本文中の空欄 にあてはまる語を、漢字一字で答えなさい。

問三 本文には次の一文が脱落しています。この一文を補うのに適切な箇所を、本文中の空欄 の中から選び、記号で答えなさい。

そんなふうにして人類史は、そして生物世界はつづいてきた。

問四 ―線部①『ヒト』は生まれたときから『社会人』なのである」とあるが、このように言える理由を述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は、一度所属した組織を抜け出すことは困難だから。
- イ 人間は、生まれてまもなく親と接触することになるから。
- ウ 人間は、何かにすがって生きていくことが宿命づけられている存在だから。
- エ 人間は、社会で生きるために様々な経験をすることが求められるから。
- オ 人間は、他の動物と違って生まれたときから一人前とみなされるから。

問五 ―線部②「ひとりの豆粒のような人間をとりまいてる家族あるいは血縁集団という小さいな円が、その外側にむかって大きな同心円にふくらんでゆく」とあるが、これはどのようなことを言ったものか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 家族や血縁集団は自分が生まれた当初は狭い範囲にすぎないが、自分が家族を設けることなどでその範囲が拡大するものだということ。

イ 人間にとって最も大切な世間は家族や血縁集団であるのに、成長とともに交際範囲が広がるにつれ、次第にその価値がないうがしろにされてしまうということ。

ウ 家族や血縁集団は現代ではもはや時代遅れの概念となっており、いまやそれにかわるものとしてはもっぱら世間がその役を担っているということ。

エ 家族や血縁集団の中における自分の存在価値は、生まれた当初はほとんど無視されていたものの、成長するにつれ、次第に高まっていくということ。

オ ささまざまな人間と関わりを持つようになることで、はじめは家族や血縁集団だけであつた世間の範囲が、次第に拡大していくということ。

問六 ―線部③「新卒の若者をあらためて『社会人』とよぶようになったのにはじゅうぶんな理由と意味があるのかもしれない」とあるが、筆者がこのように考える理由を述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもの数が減少した現代では、かつてのような同年配の集団を維持することが難しくなり、同時に「社会化」のために必要な経験を積むことも困難になってしまったから。

イ 近代以前の社会では、幼い子どもも労働力として期待されていたが、現代では子どもを働かせることは法的に禁止されているため、「社会化」する時期が遅くなってしまったから。

ウ かつては自分の属する集団内の年長者や同年配から、良きにつけ悪きにつけ、様々なことを教わることで人間は「社会化」していったが、現代ではそのような機会そのものが完全に失われてしまったから。

エ 普通教育が普及した現代では、学校に通う期間がかつてより長くなったことで、実際の世間の厳しさに触れるまでの期間も長くなり、「社会化」の始まりも遅くなったから。

オ 学校制度が整えられた近代以降、世間の厳しさもまた学校で教えることになったが、それでは不十分で、真の「社会化」は学校を出て働き始めたときから始まるものだから。

問七 ―線部④「神様のお引き合わせだ、などというのはあとになってからの理屈」とあるが、これについて説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア たとえ自分が好感を抱かない人間であっても、人間関係を円滑にするために、これも運命だと受け入れて交際すること。
- イ 自分の好悪に基づいて人を選別し、やがて発展した人間関係が宿命であったかのような意味づけをすること。
- ウ 凝り固まった人間関係を一度解消するために、人知を越えた存在を持ち出してその理由付けをすること。
- エ 世の中にいるたくさんの人々の中から、自分と共通点のある人物を見つけ出し、その出会いに特別な理由を後付けすること。
- オ ある人物についての好悪を説明するために、神という存在を持ち出して、合理的に説明をすること。

問八 ―線部⑤「複雑な気持ちになる」とあるが、筆者がこのように感じる理由を述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 幸福な人間関係を築くために重視すべきものである「相性」を、アメリカは戦争の場に応用したことで、日本は大きな被害を受けたから。
- イ 「相性」は日本に独自の考え方であったのに、これを科学的に研究したことで、もはや完全にアメリカのものになってしまったから。
- ウ これまで日本独自のものと考えていた「相性」という概念を、誰かがアメリカに漏らしてしまったことで、日本の敗戦が決定的になったから。
- エ 戦争が終わって日本とアメリカの「相性」が良くなっても、自分が戦争でアメリカから受けた苦しみを忘れることはできないから。
- オ 戦争当時、日本とアメリカの戦力は互角だったのに、アメリカが「相性」を本格的に研究したことによって戦況が大きく変わったから。

問九 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「人間」は当初は「ジンカン」と読んで「世間」と同じ意味に用いられており、「ニンゲン」という意味で用いられるようになったのは最近のことである。

イ 現代では「家族」の定義がアイマイになってきており、血縁を離れ、自分が社会に出るまでに出会った人々のことをも「家族」の中を含むようになってきている。

ウ 仏教用語であった「縁」は、前近代の日本では非常に重視されていた概念であったが、科学が宗教に取って代わった現代では日常生活において「縁」はほとんど考慮されないようになった。

エ 「世間」を通じて経験することは、道徳的に正しいことばかりではないかもしれないが、そのような経験を通して若者は「社会化」を果たしていく。

オ 組織の円滑をはかるためには、ウマが合わない人同士が同じ配属になることを避けるのがよく、また自分が少しでも「相性」が悪そうだと感じた組織からは早く抜け出るべきである。

受験番号		
氏名	ふりがな	

一

1
2
3
4
5
(す)

一

二

1
2
3
4
5
(は)

二

三

1
2
3
4
5

三

四

問一 1
2
3
4
5
6
7

問二
問三

問四
問五

問六

問七
問八

問九

問十

四

五

問一 A
B
C
D
問二

問三
問四
問五

問六
問七

問八
問九

五